

---

# 反則御伽草子

皓月 白斗

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

反則御伽草子

### 【NZコード】

NZ8819C

### 【作者名】

皓月 白斗

### 【あらすじ】

夜に支配された首都。世界は既にオカルトが肯定されていた。対妖機関「陰陽寮」に所属する陰陽師・鳴神星斗は不思議な兆しを捕らえる。それが全ての始まりだった。

## 第一話・兆し

日本にはかつて、人と妖が共に生きている時代があった。今より千二百年以上も昔。

平安とよばれる時代の事である。

当時、昼の太陽の下を人が歩き、夜を妖が闊歩する。人々は夜になれば、家と入り、外を歩く妖に恐怖したが、それは同時に、人の手の及ばない領域への畏敬の念でもあった。

しかし人は光を、それまでのロウソクの火などとは比べ物にならない光を手に入れる。電気と呼ばれるそれは、瞬く間に、無造作に、闇を喰らいつぶしていった。そして彼らは誤解をする。妖は消え、夜を手に入れた、と。だがそれは大きな間違いだ。妖は消えてなどいない。今もひつそりと確実に、闇に息づいているのだ。人が喰らうのが不可能な、わずかな、漆黒の闇の中に。

12年前。世界統合研究所、通称

「W・S・I」は心靈、妖などの非科学的存在を認める論文を発表した。それは、世界を駆け巡り、衝撃と混乱をまき散らし、各地で世界的の権威であり、全ての学問の頂点である

「W・S・I」に対する非難を起こしたが、論文は一分の隙も無い理論に基づいており、誰も覆す事が出来なかつた。皮肉な事に、今までの未解決事件、事故もその論文に基づけば解決してしまい、それは、靈・妖による靈害がある事の証明となり、世界の国々そして、世界は変わりゆく。わずか百年単位でしかなかつた、人による勘違いの夜の支配は終わりを告げた。

首都。10年前ならば、昼と見まがうばかりのネオンで飾られていたであろう中心都市は完全に夜と同化していた。降るような星空であつたが、今日は新月。わずかな星明かりが首都を照らしてはいる

が、闇は深かつた。そんな首都の一画に仄かな明かりの灯つた屋敷があつた。高層ビルの建ち並ぶ中にある平安時代頃の木造建築。似つかわしくないなどという言葉では足りない程場違いな平屋造りの建物は人々に陰陽寮とよばれていた。その名が示すとおり、平安時代より江戸時代まで絶える事のなかつた陰陽師と呼ばれる者たちが集まる場所である。敷地はかなりの広さを誇り、一役所として扱われるには充分な広さであった。

その陰陽寮の一画で星を見上げている青年がいた。漆黒の髪と黒曜石のような透き通つた色の眼がかつてはみる事の出来なかつた広大な星空を見上げている。

青年の名は鳴神 星斗（なるかみ せいと）。妖怪の存在があかるみいでた頃より激増した、妖怪による犯罪行為を抑制するため創設された特殊部隊

「ONE」のメンバーである。本人は陰陽師と言い張つているが、そもそも陰陽師は妖怪退治を専門とするわけではなく、机仕事が主な役職を占めるので、本當かどうかは微妙な所だ。

つつ、と鳴神の瞳が動いた。鳴神の目に映つた一筋の流星。星を読み、吉凶をうらなう陰陽師の直感になにか引っ掛かつたらしい。そのまま自分の机に向かつた。

「鳴神、どうかしたのかい？」

隣りの机の白髪をたらした、まだ18・19歳くらいの少年が鳴神に話しかけてきた。

「・・・だが、見た目に騙されではない。こいつは500歳を軽く超える妖怪だ。」

「なにを言つてるんだい？」500歳を超える妖怪は少年の顔で首をかしげた。名は保寿。

「いや、ちょっと星がさ。大した事はないとおもうんだけどな。一応、見ておこうと思つて。」

「ふうん?でも、占いは誰かに任せた方がよくないかな?キミ、直感は頼りになるけど、占いは当てになら無いからな~」

ケラケラと笑う保寿になめるなよ、と口の中で毒づくと六壬式占じくじんぢやくせんと向き直る。六壬式占は陰陽師が吉凶を占う道具で、得られた結果を様々な資料と直感によって判断する。しかし、六壬式占は訳の分からぬ結果を示した。

「やな感じだな。“殺意あれど殺意なし”“田的あれど田的無し”  
?ナゾナゾか?」

頭を捻つていると、保寿が近付いて来た。

「どうしたの? やっぱり無理だったのかい?」

「町によくないモンがやつてきたらしいんだが、なんのかさつぱり分からん。」

「ふんふん。“殺意あれど殺意なし”“田的あれど田的無し”ねえ。。。確かに訳が分からぬ。どうするの? 他の誰かにやつてもらつかい?」

鳴神はしばらく考えこんでいたが、ふつゝと立ち上がると手の人差し指と中指を立て、己の額に当て、なにやら咳き始める。その姿を見て保寿は首をかしげた。

「暗視の術・・・。今から外行くのかな?」

「百聞は一見にしかず、だからな。一応占いは誰かに頼んどくけど、町に近付いているみたいだから、様子みとく。」

「おもしろそудだから、僕も行こうかな。」

「来るか? いるかないのかも怪しいんだぜ?」

「散歩にはちょうどいいでしょ。気晴らしだよ。」

「なら、行くか。」

そして一人は、夜に支配された首都へと向かった。

## 第一話・始まりへの合図

「ねえ鳴神、僕はいつも思うんだけど、キミはなんで陰陽師を名乗るんだい？」

夜の首都の見回りを始めて一時間弱。保寿がふと、そんなことを聞いた。

「どういう意味だよ。」

若干憮然として聞き返すが、保寿の疑問はもつともだった。

「陰陽師なら刀はまだしも銃やらナイフやらワイヤーやら仕込んだりしないでしょ。格闘だってできるようだけど、そもそも陰陽師って基本文系だから、格闘とも縁が無いだろうし。妖怪に銃とかはきかないし、そんな発想しないでしょ。キミは術だって使えるし、靈力に至っては神様レベル。銃とか使うなら退魔師とか、もつとそっちの方がはまり役じゃない？」

保寿の指摘通り、鳴神の服装は完全に戦闘に特化したものだ。高い防弾・防刃性を誇るコート、右の大腿部と左の後ろの腰に取り付けた銃、腰に備えた一振りの日本刀。その他様々な装備が仕込まれていた。なにかのアクション映画のような姿をした鳴神の姿だった。

「保寿、それは思い込みだ。この銃の弾には符を混ぜ込んで退魔の力をもたしているし、この刀は地球上の万物を斬る力をもつてる。妖退治には都合がいいだろ。」

「だからこそだよ。名前ばっかで薄給な陰陽師より、独立して退魔師になつた方がよっぽど儲るよ。」

保寿の言葉を受け、鳴神は沈黙した。しかし、ほどなくして寂しげな微笑で口を開いた。

「・・・陰陽師なら、事前に起きることが察知できるじゃないか。」「ふうん？」

保寿の目がおもしろそうにきらめいた。

「なにか深い訳でもありそうだね？・・・ふふ、人間は天命が短い

くせに、トラブルに会う数は多いねえ。大小関わらず、数えきれないほどのトラブルを起こし起こされ、巻き込み巻き込まれる。その辺は何百年生きても敵わないな。いや、だからこそかな？一生懸命なんだね、人間は。どんなに小さい事にも。だから一緒にいておもしろいんだけどね。」

500年の時を生きる保寿がこちら側にいるのは、単なる暇潰しだ。人間を裏切る事も傷つけることも、気にしない。ただ、面白い。彼にとつてみれば人間がくだらない事であがく様は何にもまして笑いをさそうのだ。

「とんでもねえ加虐趣味だよ、お前は。それでも、お前が笑っていても、誰が笑っていても、俺たちはくだらない事であがかなきやいけないんだけどな。」

「ふふ、存分にあがいたらいいじゃない。達観した気になつて、うんざりだのなんだの呴いて、自分で動かない奴みても腹がたつしね。何ごとにも一生懸命なのは美德だよ。」

と、飄々とうそぶく保寿。

ふいににこにことほほ笑んでいた保寿とそれをジト目で見ていた鳴神が唐突に振り向いた。

「保寿、妖氣だ。」

「鳴神、悲鳴だ。」

二人は重なるように声を発し、互いの声を聞くなりその方向へと走り始めた。

## 第三話：危機

「それ」には目がない。鼻も口も耳も。猫が威嚇しようとも気付く事はないし、犬がその身に噛み付こうとも、なにも感じない。しかし、人間がいれば分かる。

「それ」にはそれだけで充分だった。性別も体格も年齢も「それ」には関係ない。いるならば殺す。存在するならば殺す。「人を殺す」という意思しか持たない存在。理由もなく、意味もなく、感情もなく、意識もなく、必要性もなく、ただ、殺す。それが「それ」だった。

今、

「それ」の前に一人の人間がいた。目も鼻も口も耳もない「それ」には分からぬが、人間は女だった。歳の頃は20代前半。鳥の濡れ羽色をした長い髪を一つにまとめて背中にたらしている。優しいしかし強い意志も秘めた瞳の女性だった。

名は月峰 霽。陰陽寮に属する、鳴神と同期の浄化術師だった。彼女の前にいる

「それ」は、今まで霁の見た事のない妖。これを妖と呼ぶには禍々しあがむ氣はしたが、だつた。ナメクジを何十倍にもした形状。そこから不気味に蠢き、見たものに嫌悪感を与える触手。半透明の体の中はタールを流し込んだかのようなドロドロとした物がうごめいている。

霁の体を悪寒が走り回る。

危険。

その単語が、霁の頭の中に渦巻いていた。

自分は浄化術師であり、それ故に様々な妖、人に害をなす妖を相手にしてきたが、ここまで禍々しいものに出会った事はかつてない。この存在より凶惡なものも、力が強いものも前にした事はあるが、この禍々しさは別種だった。

嫌な汗が背を伝う。

すでに相手は臨戦状態。

背を向ける事は危険極まりない。

零は相手を刺激しない程度に素早く懐から符を取り出した。

浄化術の符。

土地の清めを主とする零だが、浄化術は妖との戦闘においても、有効打となる。

むしろ、靈能力において、浄化術ほど妖に影響を及ぼす術はない。陰陽道における方術は己の靈力をぶつけ靈子を崩壊させるが、浄化術は負の思念より生じた妖の靈子を分解し地球の理へと環す。つまり、前者は防ぎようがあり、損傷を受けても再生する事ができるが、後者はそれができない。ある意味、最強の術である。

もつとも、それは妖に対してであって、人や普通の動物に関しては何の影響もないのだが。

「それ」が動きを見せた。

ナメクジのような体型から人の腕程もある、太い触手を突き出す。速くはあつたが反応出来ない速度ではなかつた。体を半身にしその触手を躱す。すれ違い様に指に挟んだ符をナイフの様に振つた。中ほどから切り飛ばされた触手は数回空中を回転しながら、地に落ちる事無く消滅した。

予想もしない反撃に、

「それ」の動きが数瞬止まる。その停止を零は見逃さない。新しい符を

「それ」へと飛ばす。符は流れる様に飛翔し、吸い込まれる様に「それ」へと張り付く。一瞬の後に細かな紙片となり、散弾の様に「それ」の身へと食い込んだ。己の存在を消滅させる力が身に食い込む。

「それ」は殺意しか持たないとは言え、さすがに生存本能は持ち合わせていたらしい。先程よりも長く

「それ」の動きが止まる。零は素早く身を翻し、逃走へと転じよう

とした。しかし、今度は零の動きが止まる。

「それ」に囮まれていた。

7体。禍々しさは一匹たりとも引けをとらない。なのに気付かなかつた。

動けない。動けば触手によつて串刺しになるだらう。しかしそれは動かなくとも同じ事。先程の

「それ」も動き出した。

合計8体。

文字通り、八方塞がりであった。

浄化術が比較的有名でないのは、その非力さ。絶対的な力では、他の術に格段に劣るのだ。

「それ」が触手を突き出そうとしていた。

とつさに結界を構成するが、それも長くは耐えられないだらう。このままではなぶり殺しだ。零の思考回路がかき乱され、顔に焦燥の色が浮かぶ。

8方向からの触手の攻撃。それは零の結界に弾かれるが、その攻撃力は予想以上だった。

2撃目。

零は新たなる衝撃に身構える。

しかし。

なれの前に道は非ず、あるは不滅の停止のみ！  
聞き慣れた声が響くと同時。

8体の

「それ」の前に、不可視の壁が出現、攻撃を阻む。

我が息は、さながら怒れる鎌鼬！

無数の靈力が、鎌鼬カマイタチの形をともなつて

「それ」の体を切り刻んだ。

「それ」達が悲鳴をあげる事無くのたうち回る。口がない

「それ」に悲鳴は発せられない。

その隙間を縫う様に、一人の青年と一人の少年が入り込む。

同じ職場の同僚、鳴神 星斗と保寿だった。

## 第四話・平穏

「それ」の隙間を縫うように滑り込んで来た鳴神と保寿は雲を挟んで背中合わせに

「それ」と対峙した。

「大丈夫か?」

鳴神が雲へと問い合わせる。長時間、正気を犯すかのような禍々しさに耐えてきた反動で膝の力が抜けた。

その場にへたりこみそうになるところを鳴神の腕が抱き留めた。

「おい、本当に大丈夫か?」

やつと頷く。

「ふふん、無理も無いね。戦闘経験がほとんどない雲には、この禍々しさはキツ過ぎるよ。」

保寿の意見に、鳴神は8体の

「それ」を見た。

「確かに、関心しないが。何だ?」

ふと、保寿があることに気付いた。

「雲。君、悲鳴をあげたかい?」

首を振り、いいえ、と答えた。保寿の耳が捕らえた悲鳴。それが雲の発したものではないならば。

「鳴神、別に襲われてる人がいるようだ。僕はそっちに行くよ。」

「ああ。」

人間の力ではあり得ない跳躍。垂直の壁を蹴り、ビルを駆け登りながら向こう側へと姿を消した。

保寿を見送り、視線を戻せば先ほどの「それ」が再び包囲を掛けて来ていた。

「タフだな・・・。」

ややあきれ氣味に呟く鳴神。

「雲、後でこの場の浄化頼むな。・・・お前ら、いったい何なんだ

？」

鳴神の問い合わせに、当然のように答へは無く。

「ま、なんにしたつて・・・放つておくわけにもいかんわな。」

鳴神の靈力がひるがえり、一人の服がひらめく。

それに呼応するかのように

「それ」がざわざわと動き始めた。

殺す、という意志しかもたない

「それ」が己の死に恐怖を感じたのか。

誰も、

「それ」すらも知る事無く、黒き異形は消滅した。

\* \* \*

午前6時。この季節ではまだ夜が明けきらない時間に鳴神は帰宅した。頭が少しふらふらとしている。その後、雲を陰陽寮まで送り、事後報告。未知の異形の存在が明らかになり、緊急対策会議兼警戒態勢。

鳴神が頼んでおいた占いが

「それ」を操る、さらに上の存在を示したため、問題はさうに複雑化し、それがつい先ほど一旦の終了を迎えたのだ。完徹。対策会議では居眠りもできず、休憩もなかつた。

体力はともかく、精神が疲労している。

「あのジジイども・・・。『若いのに氣概が足りん。』ってあんたらしつかり寝てんだろ？が、くそう・・・。」

悪態をつく声にも霸気がない。

なにか食べてから寝ようと考えていた鳴神の嗅覚に自宅からの優しい匂いが触れた。

ああ、そういうや今日は、とノブに触れ、扉をくぐる。

そこに、みそ汁ご飯、焼き魚といった純和風な朝ご飯を用意する、女性の姿。

長い黒髪のふわりとした笑顔の女性であつた。

エプロンを着け、今は髪を一つにくくつていてる。

佐保姫。  
さおひめ

春の女神の名。もちろん本名ではない。本当の名前を鳴神は知っている。

だが、敢えてそう呼んでいた。名付け主は他ならぬ鳴神だ。

「おかえりなさい。」

優しく微笑む佐保姫に、鳴神は全身の疲労が消えていく気がした。

「ただいま、佐保姫。」

佐保姫は2日に一度、食事や家事の手伝いに来てくれる。

言わずもがな、鳴神は佐保姫に想いを寄せてているのだが、博愛主義の佐保姫は気付かない。

まあ確かに、昔からよく干すのにそれに気付かないという典型的ヒロインタイプではあつたが。

もつとも、佐保姫はそれを覚えていない。佐保姫が持つ記憶と実際に経験した過去が違う、少々特殊な記憶喪失なのだ。

鳴神と同じ時間を過ごしながら、記憶を共有しない佐保姫。その責任をすくならず背負う鳴神はそれ以後、佐保姫の本当の名を一度として呼んだ事はない。想いを伝えた事も、ない。

\*

とはいって、こういう状況は素晴らしい幸せだ。

席につき佐保姫を待つ。

合掌。

「いただきます。」

「おあがりください。」

のろのろとみそ汁へ手を伸ばし、啜る。幸せそうな溜め息。

オヤジ臭いが、鳴神は心底幸せを味わっている。

最初こそ、互いに黙々と箸を進めていたが、やがて佐保姫が口を開いた。

「疲れてますね？どうしたんですか？」

「あ〜、新種が出て来てさ。さつきまでずっと会議兼警戒態勢敷いてたから、気が休まなくてな。とりあえず食べたら眠らせてもら

「うよ。」

米粒ひとつ残らずたいらげ、再び口裏、いじりあつせま。

「じゃ、時間がずれてるけどおやすみ。」

手を振って、自室へ。

「おやすみなさい。」

優しく朗らかな佐保姫の声を背に受けながら、自室へ入り、置ベッドへと潜り込んだ。

## 第五話・国際化

鳴神が仮眠から覚めたのは約3時間後、すでに日が高く昇った、10時を少し回った頃だった。扉を一枚隔てたところで掃除機の音がしている。素早く着替えをすませ、寝室をでる。

「おはようございます。つていうのは10時ぐらいまででしたっけ。じゃあこんにちは。完徹したわりには早いですね。」

掃除をしてくれていた、佐保姫からの気持ちの良い挨拶。日頃、妖との（中には気のいい奴もいるが。）時には銃や刀の会話を交える交流が多い鳴神に、ストレスが溜まらない理由だった。

「俺は、回復能力とか高いから。結構すぐに回復するんだよ。」

鳴神は、強大な靈力を持っている。その力は神に通じる程だ。だが、その力は生来の力ではなく、後天的に身に付けられた力なので人の身には耐えられるものではない。そこで鳴神は大半の力を封印し残りは全身へと回し、各能力の向上へあてている。

「ところで、お昼何にしますか？これから買いに行こうと思つてたんです。」

「そうだな・・・何にしようか。」

「なんでも言って下さいね。なんでも作っちゃいますよ。」

にこにこと微笑む佐保姫。

「なら、一緒に買いに行かないか？行きすりに考えてもいいだろ。さりげなさを装つたデートの誘い。」

「それもいいですね。じゃあ行きましょう。」

すんなりと承諾。が、その微笑んだ表情から見るに、誘いには気付いていないようだった。

まあ、そうだよな、と心の中で呟き鳴神は外へと向かつた

\*

\*

「・・・星斗さん？なんでそんな重装備なんですか？」

多分に苦笑を含んだ問い。大体の事は包みこんでしまつ、包容力あふれる佐保姫だが、さすがに今の鳴神には、その包容力も働かないらしい。

竹刀袋に入れた真剣。  
懐にしまった銃。

ナイフ、ワイヤー等々。

間違つても買い物へ行くような格好ではない。

そんな格好でなお、目立つのは竹刀袋だけ。他は一般市民となんら変わらなく馴染んでいる。いかに鳴神が日常的にそれらの武器を身上に付けているかを示すかのようだつた。

「職業病つてやつ？ 勘弁してくりやあ。」

変な方言を入れわざとおどけてみせるが、その物騒な持ち物のせいで見事に相殺されていた。広げた両手が非常にむなし。

「・・・いや、職業病つてのはホントだよ。」

冷めてしまつた場を取り繕うように言つた鳴神の言葉に嘘はない。「最近の妖つてのが、物騒なんだよ。なんか銃とか駆使してきたりな。プライド持てつて感じだな。」

「星斗さんが言つてはいんですか？」

素早い。的確。

なかなかやるなあ、と口には出さずに心で思つた。

「でも冗談みたいなお話ですね。銃を使う妖なんて。」

「妖つていうのは、基本的に人間の負の感情から生まれて来るからな。時代によつて人は変わるからおのずと、妖も変わるんだよ。」

食品センターを歩きながらとつとつと語る鳴神。内容は少々シユールではあつたが、穏やかな時間には違ひない。

ふと鳴神の視界に、数人の女子高生が入つてきた。

服をだらしなく身に着け、妖かと見紛うかのようなアイシャドウやマスカラをつけた、どこにでもいる不良学生といったところか。輪になつてキヤンキヤンと騒ぐ声と内容が少し離れたこぢらまで聞こえてくる。

「つてかマジつざってやー。ほんと死ねば?つての?むじり殺すよ、ホント。きやははー!」

一句詞だけでも、顔をしかめたくなる内容だった。

内容も実も伴わない、簡単に死ね、などと口にする。

言葉は言靈とよばれる力を持つ。その気がなくとも誰々、死ねと言えばそれだけで多少の呪いがかかつてしまいというのに。人を呪わば穴一一つ。日常的にそんな言葉を使っていれば、信頼しあう友達関係もつくれるはずもないだろう。

そこまで考えてふと、この雰囲気に既視感を覚える。

この感覚は、先の

「それ」との交戦時と同じもの。

次いで、己の占を思い出す。

“殺意あれど殺意なし” “目的あれど目的無し”  
あの交戦時、雲が囮まれていたのに気付かなかつた理由。それが、町のいたる所で同じような雰囲気を感じてもはや日常の一につになつてしまっていたなら。

「納得いくよな・・・」

懐から携帯を取り出し、保寿へ連絡。

「ごめん、ちょっと失礼。」佐保姫に断つたといひで、タイミングよく保寿が電話にでた。

「やあ鳴神。皆があくせくと昨日の妖について調べている今日は非番なのに、どうしたんだい?」

「つるさい、黙れ。やな言い方をするんじゃない。それよりお前、お前が助けた奴つて誰だつた?」

「女子高生だよ。どうもいかがわしいバイトからの帰りだつたらしい。まったく、厳しくお説教だね。」

「状況は?」

「友達との電話の途中だつたそつだよ。・・・昨日話したでしょ?」

「つる覚えなんだよ。ろくに寝れてなかつたから。」

「だめだな~。話はきちんと聞こうよ。」

「正論だがお前に言わると腹立つな。馬鹿にしてるよつてしか聞こえない。」

「それで？なにか思い当たつたんでしょう？」

「ああ、どうやら今回の敵は

爆音。天井の一部の崩壊。そこから覗く、空に浮いた影。

言葉の乱れだ。」

空白。

「やつかいだね。」

襲撃の音を電話越しに聞きながら、保寿がぼつとつぶやいた。

## 第六話・交錯

「はてさて、どうしようかねえ。」

電話を耳に当てたまま、鳴神が呟いた。その声に緊張感は感じられない。

「とにかく、こっちの人達は回しとくから、それまでよろしく。」

電話口からも同じく緊張感のないトーンで保寿が話す。

目の前では、襲撃者に連れてこられたらしい害意むき出しの雑鬼達が、何故か人がいる場所とは関係無しに迷走していた。鳴神がかけた幻術にはまり込んでいるのだ。デパート内にいた人々は雑鬼達の奇妙な行動に冷静さを取り戻し、鳴神が即席でつくった結界の中に固まつて集まっていた。

「とにかく、さつさと頼むぞ。」

「了解。」

非常に軽いノリで電話を終えた保寿に軽く溜め息をつきながら電話をします。

そのタイミングを狙つたかのように、頭上からの攻撃。

反射的に手を頭上に掲げ、己の靈力より展開した結界で攻撃をはじく。

が、予想よりも威力が強く展開した結界はガラスのように砕け散る。結界のかけらが散り、空中にて消滅するのを尻目に、鳴神と襲撃者の視線が交差する。

片や、嘲笑をその口に含み。

片や、不敵な笑みをその口に浮かべ。

「お前、何？」

「・・・陰陽師。」

静かに敵意と笑みを交錯させた。

鳴神に襲撃者のその嘲笑は非常に気に障るものだった。

襲撃者は、子供の姿をしていた。外見は1~2か1~3程度。保寿の外見よりもさらに幼いものだった。  
が、そこに無垢や純真といったものは微塵も感じらない。むしろ真逆の、おぞましさ。

昨日相対した、黒いナメクジもどきがさらに悪化したものだった。

## 第六話・交錯（後書き）

完結ではありませんが、良ければ♪感想などお願いします。

## 第7話・戦闘開始

「なかなかやるな。幻術が効いていないのか?」

「しばらく騙されちゃたけどね。お兄さんやるね。オンニョウジって言ったつけ?なにそれ?」

「なんだあ?最近の妖も学力低下か?日本は田茶苦茶だな。襲撃者の顔に苛立ちが浮かぶ。妖気が陽炎のように揺らめくのが見えた。

「お兄さんムカつくね。死んじゃえば?」

端正な少年の顔に残酷な笑みが張り付き、するどく尖ったような妖力が放たれる。

しかし、鳴神には当たらない。左足で弧を描き、半身にて攻撃をかわす。右手に握られるのは、いつ取り出したのか、銃が握られていた。

「最近のガキは、ホントにキレやすいな!」

言葉とともに放たれる符が効力を發揮、妖の身体の三ヵ所から放射状に消滅が始まった。

少年の顔に苦悶の表情が浮かぶ。が、それはすぐに気に障る嘲笑へと転化した。

それと同時に身体の消滅が止まり、再生が始まった。すぐさま再生

は終了し、少年は握っていた手をゆっくりと開く。その手から「ぼ  
れ落ちたのは先ほどの銃弾。軽い音を立て、床を転がる銃弾は、不  
思議な沈黙の中に沈んだ。

その沈黙をやぶつたのは、襲撃者だった。

「お兄さん、僕、目茶苦茶ムカついたよ・・・。僕の名前は、苦死  
る。お兄さんを殺すよ。」

「クシル？ また妖とは思えない名だな。」

場を焦がさんほど殺氣を受けてなお、鳴神の口からは軽口がこぼ  
れ出る。

「お兄さん・・・いい加減にしろよ！ 行け！」

クシルが手を横に薙げば、先ほどまで幻術で力を無くしていた雑鬼  
たちが我に帰り、すぐさま鳴神へと向かってきた。

鳴神は素早く人差し指と中指を立てた刀印をつくり、術を放とうと  
するが、それよりも早く、駿足を誇る妖に踏み込まれていた。あや  
またず、その妖の爪が鳴神の喉笛を狙う。

誰もが、首を取られると、その妖すらそう感じた。

しかし、実際に斬られ消滅したのは、その妖だった。

気付けば鳴神は刀を携え、その妖の斜め後方に佇んでいた。

「術が使えないれば、銃が効かなければ、陰陽師はただの人ってか  
？ 実に短絡的だな。」

刀を構える鳴神に雑鬼たちが若干怯む。  
が、すぐに我へと返り鳴神を囲い始めた。  
それに対し、鳴神は笑みを崩さず。

「来いよ。叩き斬つてやる。」

怒り狂う雑鬼が襲い来る。

爪が、歯が、牙が様々な方向から襲う。鳴神はそれを防ぎ、躱し、受け流し、雑鬼たちを斬り捨てていく。華麗に。美麗に。まるで舞つかのような立ち回りに、クシルは目を奪われた。

## 第7話・戦闘開始（後書き）

もう少しです。評価・感想お願いします。

## 第八話・激突必至

鳴神が殺陣を止めてなお、クシルが現実へと還るのに数瞬の間を要した。

舞うかのような殺陣。

行われるのは明らかに殺戮であるにも関わらず、それは演舞と評すべきものであった。鳴神を取り巻いていた妖達は既に無へと帰していった。

「驚いてるな？」

楽しそうに、そして不敵に笑う鳴神。その姿に、クシルは一瞬恐怖を覚えた。そしてそれは激しい怒りと不甲斐なさへと変わった。一瞬でも恐怖などという感情を抱いた自分への怒り。「こちやまぜとなる怒りの矛先は鳴神へとむく。

「おにいさん……なんなんだよ……気持ち悪いんだよぉ……」

叩き付けるかのような叫び声。それでなお、鳴神は五月蠅をつい、片目をすがめるだけだった。

「わんわん、ぎやあぎやあ五月蠅いな。いつまでもそんなことないで、さつやと降りて来いよ。」

真っ直ぐ見据える視線は、沸点を超えているクシルの怒りを増大させた。しかし鳴神は刀を突き付け、さらに言葉を紡ぐ。

「クシル、お前は既に器物損壊、障害未遂及び殺人未遂の罪を重ねてる。このまま陰陽寮に出頭するなら減刑を考えてやつてもいいぞ？」

不敵に笑い、首をかしげる鳴神。クシルからは、常人に視認できるほど陽炎のような気配が立ち上ぼつていた。

「殺す。殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す！殺してやるよ！おにいさん！！」

田を見開いた鬼気迫るクシルが鳴神へと向かう。鳴神の全身から油断は消えた。

## 第八話・激突必至（後書き）

かなり久しぶりですが、読んでやって下さい。

## 第九話・激戦

激昂するクシルから放たれた妖力が鳴神を狙つた。

進む道に在る物を破壊しつつ妖力はまるで蛇のようにうねりながら鳴神へと向かつ。

しかしそれは鳴神へと届く事なく鳴神の右手に握られた刀により一閃され、虚空へと散る。

予定調和の茶番劇かのような一連の戦い。

それが火薙。それが幕開けだった。

次の瞬間、鳴神の織り成した結界ごとにすら響くほど激闘が始ま

る。

クシルより放たれる妖力、鳴神が返す刀。

その陣営は崩れない。

いや、それはよく見れば鳴神が若干押しているかの見えた。単純な力を放つクシルに対し、的確に力を打ち破り一步ずつクシルへと間合いは狭められて行く。

しかし、

「クシル、茶番になんの意味がある?」

鳴神から伝わるのは、先ほどまでの軽薄さが消えた声。

隙をみた鳴神の刀が、クシルの体を切り裂くが、鳴神の表情は声の

ごとく、冷たく硬い。

見れば、

今度はクシルが、先の鳴神のごとく嗤つていた。

「おにーさん、やるねえ。でも効かないよ、ゼーンゼン」

嘲笑。

子供のように、甲高い声で鳴神を嘲っていた。

「ねーかと、楽そびぢやないし、僕を怒らせつけたしね……。  
全力で殺してやるよー。」

最後の一言は激昂だった。怒りはとけていられない。

言葉を念図とするように、クシルの背中に触手が生まれ出た。  
見るだけで嫌悪感に捕らわれる黒い暗い色の触手。それはあのナメ  
クジもどきの物だった。

「おーおー…、触手は18禁ゲームの特権だぜ……。」

鳴神が心底嫌そうに呟いた。

## 第九話・激戦（後書き）

終わりが見えてきました。皆様どうかお付き合いくださいませ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8819c/>

---

反則御伽草子

2010年12月22日02時17分発行